

近世における武士の神格化—天下人の神格化を中心に—

西村萌々子(日本史ゼミナール)

はじめに (研究の目的)

徳川家康の東照宮、明治天皇の明治神宮など、歴史上には死後に神に祀られる人物が存在する。このような人を神に祀る事例は幅広い身分で確認されているが、実在の人物が、本人の意思によって神に祀られるということは特に近世に特徴的な動きである¹。本稿は、神格化の事例で最も多く見られる武士²に着目し、その中でも近世において最初に国家規模で神に祀られることとなった豊臣秀吉ら「天下人」に焦点をあてることによって、近世の武士の神格化がどのようにして始まり、それが歴史的にどのような意味を持つものであったのかを明らかにしようとしたものである。

第一章 神格化の前提

第一節では、天下人の神格化を神格化の流れ全体の中で捉えるために、近世以前の「人が神に祀られる事例」の歴史の変遷をみた。先祖や功績のあった故人を神に祀るという行為は古くから行なわれてきたが、それが国家規模で行なわれるようになったきっかけは七～九世紀にかけて形成された御霊信仰であったことが分かっている。この怨霊の鎮魂という目的での神格化が民衆レベルにまで浸透していく過程には、吉田神道で知られる吉田家の活動が背景にあった。一方で中世後期頃から、武士の神格化が「支配」に利用される事例も見られはじめ³、天下人と呼ばれる人々が神格化を志すに至った。この天下人の神格化を主導したのもまた吉田家であったため、このことを踏まえて第二節では、吉田家の実態を神格化の動きの中で考えた。吉田家は宗源宣旨などの神々の統制手段を編み出すなど、十五世紀～十六世紀にかけて神社や神職に対する権限を確立させていた。神格化に関しては、吉田兼俱(一四三五～一五一一)が穢れ問題の克服の観点から神人合一思想を説き、人が神になれる道を拓いたことが大きい。この思想が、戦国大名が覇権を争う時代から統一政権が生まれる近世になると、より強い支配体制を築くことを願った天下人の思惑と直接結びついていくこととなった。

第二章 天下人の神格化

第一節では、近世に最初に神格化を望んだとされている織田信長、そして実際に神に祀られ、怨霊以外での神格化がはじめて実現した豊臣秀吉の神格化がどのように展開したのかを明らかにした。信長は仏教勢力に対抗するため神格化を目指したと推測されているが、実現には至らなかった。秀吉は本人の遺言によって神格化が進められていたが、その神号については「八幡神」から「大明神」への変更がなされていたことが史料から読み取ることができる⁴。それぞれの神号の意味を検討していくと、秀吉の周辺人物が当時の対外情勢、家の存続といった問題を視野にいれつつ勘案した結果の神号変更であったことが分かる。

第二節では、秀吉と同じく神号を与えられて神となった徳川家康の神格化に焦点をあてた。家康の神格化については、死後その神号をめぐる山王一実神道の天海と唯一神道派の崇伝の間で論争になり、天海の強い主張が通って「大権現」として祀られた、とするのが通説であった。これに対して、最新の研究では、野村玄氏によってこれまで遺言とされてきたものとは異なる史料からのアプローチが為されている⁵。野村氏の指摘は新しい遺言の発見と、論争の背景として新たな見方を提示したという点で画期的であったため、この野村氏の指摘が先行研究の中でどのように位置づけられるのかを考察した。

天下人らは現世に広く影響力を持ち、亡くなった後もその権威を発揮し続けることを期待して、神格化を目指した。その一方で、「権威の維持」は天下人だけでなく、その次の為政者らにとっても重要な課題であったため、神号や祭儀の方法は必ずしも本人の希望通りにはならず、後世への影響やその時々々の政治状況を加味しながら行われていたことが分かる。つまり天下人の神格化は、本人の意思のもとで行われていながら、後を担う為政者や、幕府を精神面から支えた宗教者などの「祀りあげる側」の政治的意図が大きく反映されたものであったといえるのである。

おわりに

近世の武士の神格化は、権力者らがその権威を発揮し続けることにより「支配」を有利に進めることを期待して始まった。武士の神格化の動きはその後、各藩主・藩祖が神格化され、藩の中核的な役割を担うということに見られるようになる。近世に武士が神格化されるということは、その人物の築いた支配体制や権威を維持すると同時に、後の社会集団にとっての精神的支柱として機能しうる可能性を持つものであった。また、近世以前の先祖や功績があった故人を祀るという流れをくみつつ、神格化は庶民レベルでも盛んに行われるように

なる。為政者に限らず、神となった人物が藩や特定の地域で中核的な存在となることが見られ、これは明治期の英霊の祭祀や天皇の神格化にまで連なると考えられる。

○主要参考文献一覧

- ・山田雄司『怨霊とは何か』（中公新書、二〇一四年）
- ・井上智勝『近世の神社と朝廷権威』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- ・高野信治『武士神格化の研究』（吉川弘文館、二〇一八年）
- ・曾根原理『神君家康の誕生 東照宮と権現様』（吉川弘文館、二〇〇八年）
- ・野村玄『豊国大明神の誕生：変えられた秀吉の遺言』（平凡社、二〇一八年）
- ・野村玄『徳川家康の神格化 新たな遺言の発見』（平凡社、二〇一九年）
- ・深谷克己『死者のはたらきと江戸時代—遺訓・家訓・辞世』（吉川弘文館、二〇一四年）

1 曾根原理『神君家康の誕生 東照宮と権現様』（吉川弘文館、二〇〇八年） 一〇～一三頁

2 高野信治氏が武士の神格化の事例を集めた一覧稿の制作を行っており、著書『武士神格化の研究』（吉川弘文館、二〇一八年）の中で「武士に注目するのはいわゆる人神の事例に武士階層が多いことによる²⁾と述べていることによる。（初出二〇〇七年）

3 佐藤友紀「武士の神格化に見る新秩序の構築—秀吉がめざしたもの—」（『国史学研究』三十三、二〇一〇年）六〇頁～六一頁

4 『当代記 駿府記』（続群書類従完成会、一九九五年）慶長四年四月一九日

5 野村玄『徳川家康の神格化 新たな遺言の発見』（平凡社、二〇一九年）